

## 体験を、実習後の演習でどのように語り、書くのか？

### —実習後の演習の方法と学生の振り返りをもとに

○ 鹿児島国際大学 崎原 秀樹 (6715)

キーワード：省察 雑談 エッセイ作成

#### 1. 研究目的

崎原(2009)は、新カリキュラムによる SW 演習 I II の方法論を検討した。2010 年度の SW 演習 I の試みを方法の視点から検討し、SW 演習 II III との関連で考察した(崎原,2011)。2011 年度の SW 演習 III の試みを取り上げ、方法論について検討を行った(崎原,2012)。

今回は、学生レポートをもとに、「省察」を促す、実習後の演習の方法の検討を行う。

#### 2. 研究の視点および方法

2011～2013 年度の SW 演習 III での学生レポートを 3 つの視点により整理した。3 つの視点は、演習の方法とレポートの出題意図をもとに作成した。結果を、3 年間の筆者の SW 演習 III の方法との関連で検討し、「省察」を促す実習後の演習の方法について考察した。

レポートは、本演習では、どのような内容をどのような方法で取り組み、その中で何についてどのように考えさせられたかについて書かせた(600 字以上)。

#### 3. 倫理的配慮

本学会研究倫理指針にそって、演習や研究での語りや記録では施設名、個人名、障害名等を出さない理由と意義を講義後、学生と話し合い、その原則で演習を進めた。記録をまとめる際、内容の理解に支障がない限りで年齢や性別等事実関係の省略や変更を行った。

#### 4. 研究結果

##### 4.1. 学生レポートの特徴

レポートを、①筆者の演習方法に対応した振り返り、②体験をどのような視点で見直したか、③具体的な気づきと今後にどのようにつなげるかの 3 つの視点が、どんな組合せで含まれているかで整理した。2011 年度(12 名中 3 名：散逸のため)、②③が 1 名、①②③が 2 名であった。2012 年度(14 名中 11 名)、①②が 3 名、②③が 2 名、①②③が 6 名であった。2013 年度(15 名中 15 名)、②が 3 名、②③が 2 名、①②③が 10 名であった。

##### 4.2. 学生のレポート(学生 3 名分一部抜粋)と筆者の方法(崎原, 2012)の変遷

一番に印象に残っている出来事をメモに書いて発表した。授業が進む中で先生や学生同士の質問の受け答えの中で見つめ直し、文章にした。私の出来事は、職員と意見の対立があったり、痛い思いをしたり、とあまりいい思い出ではなかった。しかし、冷静に振り返ると、こういうことを言いたかったのかな? とか、自分の考えを改める部分もあり、もう一度実習記録を見返す中で実習場面を思い出せた。その時の様子を他の人にもわかりやすく書くという作業が大変だった(2011 年度学生 A)。

私に限らず、他の皆も実習体験を文章化するのが難しかった。自分では分かっているも

他の皆に伝わらないことが多くあった。先生はじめ他の皆が質問や解釈をする中で内容が深められた。実習当時気付かなかったことに気付いたり、1つの焦点に絞らず多角的な視点で見たりした。徐々に実習での感覚を思い出すことができた(2012年度学生B)。

自分の中では話したいことがまとまっているがいざ話そうとするとうまくしゃべれなかった。文章にするまでの流れはまず過去の先輩の冊子を参考にした。次の週から印象に残るエピソードを一つ一つ箇条書きで書き出した。その中から冊子に書くには何がいいのか考えた。文章を考える中でそのエピソードに対して何をどういう流れで書きたいのか迷う場面が出てきた。「コミュニケーション」に焦点をおき、私が体験したこと、利用者との関わり、その中で自分が考え、思ったこと、職員のアドバイス、職員の利用者に対する対応を見て自分とどう違い、どこに気をつけているのかを書くことにした(2013年度学生C)。

まず本人が印象に残っていることから話させる、次に筆者がその学生の話聞き、必要と思われる視点から質問をする中で話の輪郭や筋道が見えるようにする作業を行った。上手く話せないときや話したくない内容は追及しない。次に一人の学生が話したことを、他の学生が質問して筆者と同じ作業を行わせた。その後、文章化し報告させ質疑応答を繰り返す中でエッセイとしてまとめさせた。2011年度は、演習5回目以降も中間報告と称して途中経過報告とそれに対する質疑応答を行った。2012年度も全員ではないが、2/3近くはこれを行った。2013年度は、5回目以降、各自パソコンを持ち込み、エッセイ作成を始めた。演習時間内での個別指導及びメールによる添削指導が中心になった。

## 5. 考察—「省察」を促す、実習後の演習の方法として

一連の作業自体が面接と記録、つまり互いに体験したことや聞きたいことをどのように話し書くか、逆にそれを引き出すにはどのように聞き、反応すればよいかの試行錯誤だ。結果にあるように2年目で半数弱、3年目には2/3の学生が、他者の体験を聞くことも含めて体験をどのように振り返り、次に何をしたらよいかを発見する作業につながった。

人の営みをどのように捉え、どのように関わるのかを検討する際の原点とは何か。朝起きてから夜寝るまでの体験を出来事として、聞く人や読む人もその場に参加しているかのように話せること、書けることだと考えて現場で働いてきた。社会福祉現場での日常、そこで出会う人の他の場面での生活の積み重ねも含めて実習体験をどのように表現するかからすべては始まると考え、「省察」を促す、実習後の演習の方法としてこのような試みを続けている。今後の課題は、①学生の意向も聞き、進めてきたが、3年目では個別指導の側面が強くなり、レポート内容も変わった。中間報告と称したやりとりをどのように復活させたらよいか、②レポートでは、今回、取り上げたレポート内容をふまえ、実習におけるアセスメント力、マネジメント力とは何かも書かせているが、それとの関連で、完成したエッセイ(3年間とも全員提出)について討論する機会をどのように作るかである。

文献:崎原(2009)日本社会福祉学会九州部会第50回研究大会,94-95pp、崎原(2011)日本社会福祉学会九州部会第52回研究大会,54-55pp、崎原(2012)日本社会福祉学会第60回秋季大会(CD-ROM版)